

## コミュニケーションができない

目の不自由な人を、点字ブロックに埋め込んだICタグで誘導するシステムの実験が、来年、熊本市中心市街地で行われる予定である。それに向けた店主たちの勉強会があり、その場で商店街のバリアチェック報告をすることになって、大学生たちと一緒にアイマスクで目隠しをして商店街を歩いた。ICタグの誘導システムが導入されると、街の中で、「もうすぐバス停です」とか、バス停では、「どこ行きのバスが来ました」と教えてくれるらしい。しかし、現実、混雑時には、バスは停留所からバス3台分も手前で停車するので、目の前のバスに乗ったら大変なことになる。システムを実用化するには、ICタグの対話性能を徹底的に高める必要がありそうだ。



花屋を過ぎると



総菜屋があり



また花屋があって



漬物屋の角を曲がる



この日は、実際に目の不自由な方に指導してもらったが、この方は、商店街の中に（匂いの）ランドマークを持っており、匂い道案内の達人だった（上の写真のとおり）。ドラッグストアも匂いのランドマークになる。何の匂いかと言うとシャンプーの匂い。言われてみれば、なるほど、そうだ。

最近、消費者教育の専門家と話をしたのは、「ケータイ電話を紛失したらどうなる？」と学生に聞いたときの答えについて。・・・「どうしていいか分からなくなってパニックになる」「自分が自分でなくなる」というような回答が結構多いそうだ。悪用される不安ではなく、つながりを失うことに対する不安の方が大きい。ケータイを万能の用心棒のように考えている女学生もいるらしい。例えば、夜道を歩いていて変な男が近づいてきたとき、ケータイを取り出し電話しているフリをすれば安全だと考えている。誰かとつながっている人を襲うことはできない！という論理。多くは、先生とマジに話すつもりがないから、この程度の答え方をするのだろうが、こういう子には、語彙の貧困さと対話することへの不誠実さから、哀れを感じる。

目の不自由な人に、自分の姿を説明するのは結構難しい。バスに乗るときに介助するとなると、さらに難しい。並みの対話力、配慮では、十分なことができない。かなり頭を使う。

小学校の体育館などで、子どもがアイマスク体験をする現場に何度か立ち会ったことがあるが、体育館では、「目隠し遊び」に終わっている場合もある。やはり、街の中ですべきだろう。どうせするなら、アイマスクをつけて買い物させたい。そうすれば、子どもたちの「話して伝える力」が大いに鍛えられるだろう。この場合の子どもには、うちのバイトの大学生も含またい。よし、アイマスク買い物体験ができる商店街、というのをひとつやってみようか！